

栃木大平山コース

大高竜亮

四半世紀を越えても変わらない栃木大平の地。当時と同じように父親と巡るパーマネントコースは、ほろ苦く幸せの味がした。

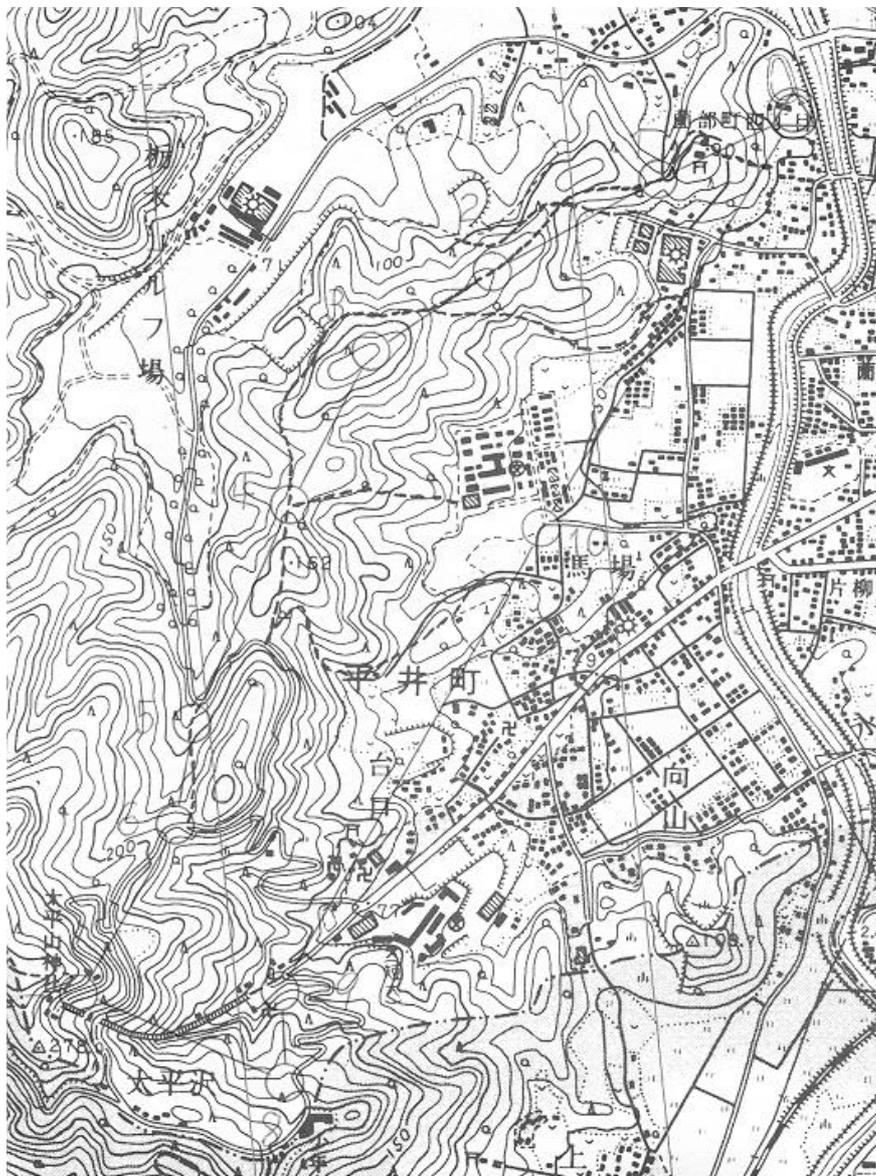
栃木大平山コース

栃木県 No.42 J O A 公認 No.43
10 km 10 ポスト

今回は栃木県の名門、栃木大平山コースです。懐かしく思われる方も少なくないのではないのでしょうか。私自身も今回は2度目の挑戦。最初に回ったのは、オリエンテーリングを始めた年である昭和53年のこと。当時まだ小学3年生。家族で回っていた頃で、記憶も断片的にしか残っていません。24年ぶりに再訪し、途切れ途切れのその記憶を辿りながら歩いてきました。そして、これまた久しぶりに65歳になる父が八ヶ岳登山の準備にと同行することになりました。

スタート地点の栃木市民プールは今も変わらず営業を続けています。ただ、この日は台風後の点検のために営業の休止をしていました。栃木駅から炎天下、30分も歩いて到着したのに2階の窓口は閉鎖されていたため、一瞬ドキリ。しかし、1階の事務所に担当が在勤しており、壁に取りつけられている専用ケースから地図を取り出し、1枚あたり50円の代金を支払うとマスターマップも見せてくれます。ただし、このマスター、かなりいい加減。山道の入口に設置されている案内板に掲示されているマスターのほうが正確に記されています。前回のマップを持参しましたが、第10ポスト以外は全く変更ありません。マップは国土地理院のもの複製ながら、平成9年作成のものに更新されています。

スタートしてすぐに、急坂が待ち構えていたという記憶は全くその通りでした。坂道を詰めるとタンクが出現。それを回り込むように進むと、分岐の先のやや奥まったところに第1ポストが立っています。さすがにポストは24年前と同じというわけではなく、従来の支柱に首だけが挿げ替えられています。



第2ポストは第1ポストの奥へ続く、一見不明瞭な細い小径を選びます。はっきりとした道につられないよう要注意です。OLコースの小径は、殆ど使われていないような雰囲気ですが、真夏のこの時期でもさほど苦勞なく通過することができます。この道で久しぶりにナナフシを発見しました。ポストは道端にあります。

第3ポストへは新地図でも道は追記されていませんが、よく整備された小道が導いてくれます。第2ポストから鞍部に下ると、やや西寄りから小道が伸びています。ピークまで一気に上ると第3ポストに出会います。

第4ポストへは実に雰囲気の良いルートが続きます。坂道の上り口にポストはあります。

一山越えると大平山の遊覧道路に一旦出ます。ヘアピンカーブから続く広々とした遊歩道に入ると、小川のほとりに涼しげに立つ第5ポストが出迎えてくれます。顔を洗ってここまでの汗を流し、第6ポストへ。

ここはカンタン。この遊歩道を上り詰めると再び道路に到達。視線を右手に転じると、背の低いポストが目に入ります。そしてこのコースのハイライト、大平山神社へ向かいます。

桜の木が立ち並び、足元にはあじさいが咲き誇る一帯。この時は辛うじてあじさいの花を見ることができましたが、終わりかけといった状態でした。道路を進み、境内にさしかかると、第7ポストは以前と全く同じ所に立っています。形式に則って、二拝二拍手一拝をして神社に参拝。この太平山神社の創建は天長4年(827)、慈覚大師によるものと言われ、江戸時代、徳川3代将軍家光以来代々が崇敬したそうです。

神社をあとにすると、もう1つのお待ちかね、謙信平はすぐそこです。お待ちかねの理由は2つ。1つは「陸の松島」と称えられるここからの関東平野の景色。そしてもう1つは名物のたまご焼き。道に面した「松乃屋(0282-22-1740)」がオススメです。ボリュームのあるしっとりとしたたまご焼きは絶品。焼き鳥、太平だんごも名物

で、3品あわせた「名物セット」も用意されています。梅雨明け当日の「海の日」ということもあり、すっかり汗だく。男二人とあれば、ここは一杯いかないわけにはいきません。結局ジョッキ2杯の生ビールを飲み干し、最高に幸せ気分で第8ポストへ向かいました。0Lの最中のアルコールは24年間で初。残りは下り坂とあって、すっかりいい調子で進んで行きます。第8ポストは県立太平山少年自然の家近くから遊歩道に入るとその奥に設置されています。

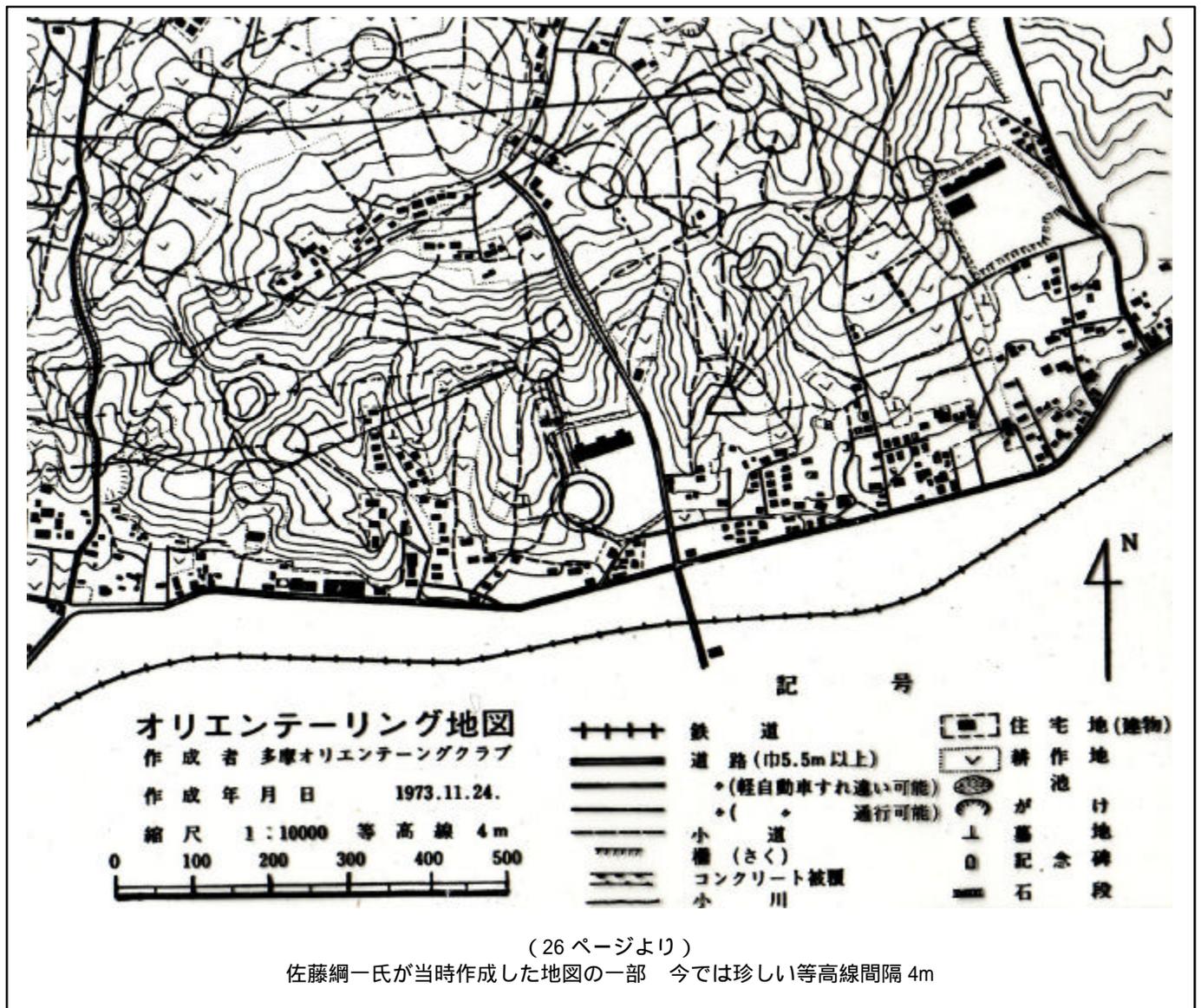
第9ポストの連祥院六角堂へはそのまま下って行くことができます。立派な道にもかかわらず、なぜか地図には記載がありませんが、元の道路に戻る必要はありません。あじさい坂の入口にポストはあり、6月中旬から7月初旬にかけては見頃です。

ここから坂を下って行くと右手に見える学校は、昭和60年から3年間通った我が母校、國學院大学栃木高校です。さらに下り、民家を抜けて行くと栃木農業高校が見えてきます。最終ポストはその脇にポツンと立っていて、遠くからでも確認することが出来ます。以前のポスト位置からは北寄りに移設されています。

最後は市民プールへは戻らず、そのまま東へ。永野川にかかる二杉橋を渡ったところにある「二杉神社前」というバス停に向かい、國學院から下ってくる栃木駅行きのバスを待ちました。

愛着のある太平の地。四半世紀の時を越えても変わらずこうして迎えてくれる0Lコースがあることを誇らしく思えた1日でした。

(2002年7月20日踏破)





日本にオリエンテーリングが導入され、発展していった1970年代に普及面、指導面で活躍したオリエンティアがいる。佐藤綱一。現在長野県松本市在住。身体的に競技は無理になってきたが、地元公民館館長として地域行事にオリエンテーリングを企画している。

20年の回想

暗黒の中をどう歩いたのか、どの位の時間が経過したのか、そこには白銀のような青白く輝く砂漠が広がっていた。遙か遠くには鋭角三角形の形状をした奇妙な樹木だけが見える。周囲には誰もいない。コンパスも地図もない。進もうとしても第一歩がどうしても踏み出せない。しばらく凝視していると奇妙な三角形の樹木は、音も無く一斉に倒れしまった。

気が付くと、誰かが私の頬をたたきながら耳元で呼んでいる。

「早く目を覚まして・・・手術はもう終わったよ 佐藤さん」

私は5時間余りの胃潰瘍の手術の間不思議な世界をさ迷っていた。

「手術しても一月くさいで職場に帰れません」との医師の言葉を信じて手術後の治療に努めたが、体調は回復しなかった。病室でぼんやり天井を眺めながら20年余りのOLの日々を想い出していた。

OL 事始め

1971年の初夏、読売新聞に掲載された徒歩オリエンテーリング参加者募集の記事を、当時高校一年生だった長女が見つけた。家族6人で参加したのがOLの始まりである。当時私たちは東京都東村山市に住んでいた。地図とコンパスを用い、山野を歩くスポーツ、それは登山を趣味にしている父にとってやさしい事だと子供たちが考えたのは当然だったと思う。結果は惨めなもので、家族の信頼をいっぺんに失ってしまった。

1972年春、埼玉県入間市高麗でパーマメントコース開設記念大会が開かれ、家族5人が参加し、3位に入賞して前回の雪辱を果たした。パーマメントコースは同時に元加治(もとかじ)、越生(おごせ)にもでき、100キロコンペレースとしてだけでなく、その後くり返しOL競技会が開かれるようになった。私だけでなく、当時のオリエンティアにとっては忘れ難い場所だと思う。

1972-73年代は、現在のように地域、大学、職場などのOLクラブは殆どなく、東京OLクラブや読売新聞社・電鉄会社などの主催するOL大会が毎月のように開かれるようになった。新聞記事や市広報、レク情報の中にOL大会の記事を見つけてはOL仲間知らせあい、大会参加が楽しみの時代であった。

スウェーデン OL 技術チームの来日

1973年はわが国のオリエンテーリング発展の、節目の年だったと思う。この年の夏、日本オリエンテーリング委

員会は、わが国のオリエンテーリングの普及と技術の向上を目指し、スウェーデンOL連盟の各分野の指導者8名を招き、指導者講習会を東日本(埼玉県)、西日本(佐賀県)で開催した。この時の講義は、委員会の青木弘さんの通訳を介して行われたが、私は講義の内容を充分理解できずに終わったように思う。特に地図調査の実習では、断片的の知識のみで、実際にはどう手をつければ良いか分からなかった。

0 マップ作成の提案

スウェーデンのOL技術チームの講習会が終わって間もなく、多摩オリエンテーリングクラブの会長柳下惇夫さんから、0マップ作成の提案があった。場所は狭山湖の東の狭山丘陵で、ベースマップは所沢市の行政図(1:3,000等高線間隔4m)、ベースマップとしてはかなり雑であった。印刷仕上がりの時の縮尺は1:10,000。

調査地域は8つに分け、それぞれの調査者を割り当て、調査を始めた。調査の第一は道の記入から始め、畑、家屋などで小さな特徴物の記入や等高線の修正などにはほとんど手が届かなかった。

調査の第一日、私は自分の調査区域を回っただけで何一つ記入も無く引き揚げた。各自の調査結果は一枚の原図にまとめ、印刷するための原図作成のためフィルムを重ね、ニードルペンや烏口(からすぐち)でトレースしていったが、完成時の寸法を考えながらの作図の線巾には苦労した。作図は私が担当した。決して良い仕上がりにではなかったけれど、11月24日の競技会の参加者には喜んでいただいたと思う。

(つづく)